

# 相互独立的自己観と相互協調的自己観の 発達についての臨床心理学的研究

甲子園大学大学院人間文化学研究科 松岡 恵

## 概 要

本研究の目的は、現代日本人の自己観の発達と、子どもが認知する父親像、母親像との関連について検討することにより、臨床場面への効果的な関わり方を探求することである。

他者との関係における自己の捉え方について、Markus&北山(1991)は、「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」という2つの概念区分を提示している。これら自己観の形成には、日本的親子関係及び親の養育態度の影響が大きいと思われる。そのため本研究では、これら2つの自己観に注目し、それらの発達の様相を明らかにしようと考えた。

筆者は、青年期から成人期における親の養育態度に関する認知を通して親イメージを明らかにすることは、実際の親からの養育態度と、子どもの受け取り方、記憶がくい違っていたとしても、そのこと自体が臨床的に意味のあることと考えている。临床上では、成人期に至っても父親や母親に対する葛藤が大きい場合、人間関係に問題を抱えるという報告が多いが、調査研究で、成人を対象にした父親像、母親像についてのものは少ない。そこで本研究では、相互独立的・相互協調的自己観と、親の養育態度(親からどのように養育されたかの記憶・受けとめ)との関連性、及びその人がその時期に直面している課題と、その後親に対する認知の変容がいかにして生じ、自己観とそれはどのように関連しているかを明らかにすることを目的に、調査研究と事例研究の両面から検討と考察を行った。

まず、青年期から老年期にわたる相互独立的自己観と相互協調的自己観の発達と、親の養育態度の認知との関連について実証的に明らかにするため、横断的調査研究を行い、その内容について、第2章で述べた。

対象者は高校生から80歳代の高齢者までの196名(男性56名、女性140名)であった。全年代の対象者への質問紙調査では、相互独立・相互協調的自己観尺度(高田・大本・清家,1996)を用いた。相互独立性と相互協調性各々10項目計20項目から構成

され、7段階評定である。併せて、質問紙検査である親子関係診断尺度 EICA（辻岡・山本,1976）を行い、子どもから見た父親、母親それぞれの養育態度について、3件法で回答を求めた。

その結果、(1)相互独立性、相互協調性共に性差は認められなかった。(2)相互独立性得点と相互協調性得点との間には、有意な負の相関が認められた。(3)相互独立性・相互協調性の年代別にみると、40歳未満までは相互協調性が相互独立性を凌ぐが、40歳以上では得点が逆転した。(4)年代間の得点差をみるため、年代別4群×性別の分散分析を相互独立性と相互協調性に対して行った。その結果、相互独立性では青年期と若年成人期、中年期との間に有意差はなく、老年期が青年期、若年成人期より有意に高かった。一方、相互協調性は、中年期と老年期の間では有意差はなかったが、その他の年代間、すなわち青年期と若年成人期、若年成人期と中年期との間で有意差があり、年代が上になるほど得点が低かった。(5)親の養育態度の認知では、母親の養育態度を受容型と認知している者が全年代で最も多く、青年期でやや拒否型が多く、若年成人期と中年期で受容型に次ぎ自律型が多かった。一方父親の養育態度の認知に関して受容型が多いのは老年期のみで、他の年代は拒否型、自律型、受容型に分散していた。(6)認知された父親・母親の養育態度それぞれを「拒否型」と「受容型」に分け、相互独立・相互協調性得点との関係を見たところ、父親の養育態度を「受容型」とした人の相互協調性は、「拒否型」とした人よりも有意に高かった。また、相互独立性では、父親母親それぞれの養育態度の認知による有意差は認められなかった。

以上の調査研究結果から、青年期と若年成人期の相互協調性の高さは、他者との違いに意味を見出すよりも、同世代から浮いた存在になっていないかを気にする現代の若者の特性を示していると考えた。相互独立性と相互協調性が中年期を境に逆転し、老年期に両者が高くなることについては、中年期に両極性の偏りを減じる方向へ向かい、Erikson のいう統合に到達することを示していると考えられる。

また、自分と異なる価値観を持つ他者と社会的に関わりながら相互独立性を高めつつ、時に相手と折り合いをつけるという力を養うことが人格の成熟への方向と考えるなら、社会とつながる役割の大きい父親を肯定的に認知することと、子どもの相互協調性の高さとの関連は大きいと考えた。

第3章では、筆者の自験例から臨床ケースとして不登校青年期男子とうつ状態の中

年期女性 1 例ずつと、健常の若年成人女性の事例を提示し、相互独立・相互協調的自己観が、ライフイベントや周囲の人たちとの関係性の中で相互に影響を受けながら、どのような発達経過をたどり、人格的発達と心身の回復へつながっていったのか、そして親の養育態度の認知はどのように関連しているかについて検討と考察を行った。

青年期男子の事例では、父親は独裁的で、父親と母親の養育態度は対立しており、青年は父親に対して自分は受容されていないと認知していた。青年の自己肯定感は低く、自発性に乏しい状態にあった。相互協調性は、第 2 章で述べた筆者の調査研究結果によれば、同世代の平均値であったが、この相互協調性得点の高さは、その時期の事例の臨床像からは、周囲と協調して適応している状態を表しているとは言えず、むしろ周囲からの評価を気にし過ぎた「同調」の意味合いが強く、自己評価の低い人も高い得点を示したものと思われた。一方相互独立性は、同年代と比べ、かなり低い値であったが、心理療法を経て、適応状態が好転した時期には、得点の上昇が認められた。そして父親に対する認知も、EICA の「拒否的統制型」であったものが、「平均型」へ変化が認められた。

中年期女性の事例では、幼少期、両親から十分な基本的信頼感を獲得できず、自己肯定感が低いうえに不幸なライフイベントが重なり、うつ状態にあったクライアントを取りあげた。心理療法を経て、成人期の発達課題である「生殖性」に伴う自己観を発達させ、職場や家庭での適応が改善された。来談時には相互独立性が優位で、相互協調性が低かったと見受けられたクライアントであったが、終結に近い時期には相互協調性も上昇しており、「信じて待つことの意味」への気づき、息子の言葉がきっかけとなり、物事の捉え方の転換がおこり、他者の捉え方の変化と、置き去りにしていた相互協調的自己観の発達が認められた。

若年成人期の事例では、相互協調的自己観は高く、父親の養育態度は「拒否的統制型」と認知していた女性が、両親からの独立をめぐる家族の問題を契機に、自分自身の自己観を見つめる中で葛藤と危機を経験し、夫婦で乗り越えた一例であった。両親への平和的独立宣言が成功した時期には、事例が同世代の平均より低い得点であった相互独立性自己観が伸長していたと推察された。このケースは今後、相手に合わせるだけでなく、自分の考えに自信を持ち、それを周囲の人に理解してもらえよう働き

かけるという中年期にふさわしい相互協調性と相互独立性の発達に取り組んでいくと思われた。

総合考察においては、(1) 青年期から老年期にかけての相互独立的自己観と相互協調的自己観の発達過程について (2) 中年期の意味について (3) 青年期から老年期にわたる子ども側の自己観と、子どもが認知している親の養育態度との関係について (4) 人格発達と心身の回復過程の検討の 4 点について以下のように考察を行った。

(1) 青年期において相互協調性の高さと相互独立性の低さが顕著に見られたことは、現代の日本の青年期が他者指向的な時期であることを示しており、相互独立性が適度に発達していることがこの時期に自律性を発揮し、進路を探索していくエネルギーの基盤として必要であると考えた。(2) 中年期は Gould(1978)の言うトランスフォーメーション(変態)できる可能性が秘められており、現代日本の成人が真の成人性を達成する入口は、今回の調査研究で明らかになった相互独立性が相互協調性と逆転して高くなる 40 歳前後であろうと述べた。(3) 父親像は母親像より心理的な受取り方が反映されやすいため、「拒否的」と認知した人は、実際よりネガティブに父親の養育態度を受け取っている可能性があると考え、他者との関係性においても相互協調性が高くない人が多いのではないかと考えた。(4) 第 3 章の事例で示したように、心理療法や、相手の力を信じ待ちながら導く存在との出会いによって、成人後も自己観や他者への認知に変化をもたらし、自己観の成長が期待できると考えた。また、相互独立性の発達が促進されるにあたって、父親の存在は大きく、さらに言えば夫婦の関係性がポジティブにもネガティブにも子どもの父親像に影響し、子どもの自己観の発達において重要であると考えた。